

「希少性」と市場経済についての理解を深める授業の開発

— 『丸選手のFA移籍は市場経済の定めなのか?』

「価格」と「権力」に関わる錯覚を乗り越えさせる授業の構想 —

阿部 哲久

社会的に市場経済に対する正しい理解が進んでいないのではないかという問題意識からその原因を検討し、仮説に基づいて「希少性」「効率的な資源配分」について正しく理解できる授業モデルを開発し、生徒の関心の高いプロ野球の地元球団の選手移籍を教材として用いた授業案を作成した。

1. 問題の所在

2018年、広島東洋カープの丸選手が、FA（フリーエージェント）制度のもと、高額な契約金を得て資金力のある東京の球団に移籍した。プロ野球ではFA（フリーエージェント）制度によって高額な契約金での移籍が話題となる。その際肯定否定の立場を問わず、しばしば聞かれるのが「これが市場経済だ」という表現である。「市場では『最も高い価格を付けることのできる』プレーヤーが商品を買うことができる。市場経済とはそういうものだ」という理解が社会的に共有されているように見える。

しかしこれは誤った認識である。高い契約金で集めた選手を余らせて控えている状態は希少な資源（能力）が無駄になっている＝非効率的な状態である。市場経済において価格を通じた資源配分が効率的であるためには全ての買い手の資金力が等しい（「どれ位欲しいか」という理由によってのみ需要者が提示する価格が決まる）ことが前提になっている。にもかかわらず、市場経済とは金のあるものが総取りをする弱肉強食の世界だという誤解が広がることは、様々な社会問題の背景になっているように思われる。

批判的に述べられるのならば良さそうにも思えるが、現実には、批判しつつも「市場経済なのだから仕方ないのだ」と受け止めてしまう人がいるだけに留まらず、「どうせ市場経済なのだから成功のために誰かを犠牲にすることは避けられない」といった主張をする経営者さえもメディアに登場している。批判によってかえって弱肉強食の世界観を社会に広げていると言わざるをえない状況であり、場合によっては権力者が異論を封じるために用いるような例も

見られることは大きな問題である。

このような状況の背景には、公的分野の授業で価格について学ぶ授業が、需要と供給のグラフの説明に終始して本質的な理解をさせることができていなかったという問題があるのではないかと。「希少性」と「効率的な資源配分」の正しい理解を進めることができる授業のあり方を確立することが急務であると考えられる。

2. 研究の目的と方法

中学校学習指導要領では従来から市場での「効率的な資源の配分」という表現がされてきたが、新指導要領ではその前提となる「希少性」が新たに見方・考え方として例示された。本研究の目的は、「希少性」「効率的な資源配分」について正しく理解できる授業モデルを開発することである。そのために、社会に広がる市場経済への理解の誤りの原因を明らかにし、誤った理解を回避できるような授業案を作成する。教材としては生徒にとって身近で関心の高いプロ野球のFA制度等を扱う。

3. 授業の構想

① 効率の意味と「希少性」

学習指導要領に登場する現代社会の見方・考え方としての「効率と公正」では、効率とは社会全体として無駄のないことと定義されている。この定義は日常語としての効率の意味とは異なっているが、それは経済学における効率性の概念が取り入れられているからである。経済学でこのような効率性の概念が重視される背景には「希少性」の考え方がある。「希

少性」は新学習指導要領において、公民的分野の「経済に関する様々な事象や課題を捉え、考察、構想する際の概念的な枠組み」として新たに加えられた。「希少性」とはどのような概念なのだろうか。

経済学では「希少」とは、「欲しい人が欲しいだけ手に入ると足りなくなる」ことであると定義されている。実は世の中のほとんどの財やサービス(時間や才能も含まれるかもしれない)は希少であるとも言える。だからこそ我々是对価を払って財やサービスを手にするのである。実際に現代の社会で希少では無いものを採るのは難しい。かつては「ダイヤモンドがなくても生活には何も困らないのにダイヤモンドは高値で取引され、水がなければ生きられないのに水には値段がつかないのは、水が希少では無いからだ」などといった説明がされてきたが、近年では安全な飲み水は希少である事が認識されるようになり、水ビジネスが注目されるようになっていく。今日、希少では無いものは空気ぐらいではないだろうか。(これも今後環境破壊が進めば変わるかもしれない。)

さて、欲しい人が欲しいだけ手に入れることが不可能であるとするなら、次に問題になるのは「誰がどれだけ手に入れ、誰があきらめるべきなのか」ということである。なるべく多くの人の手に渡るとか、最も必要としている人の手に渡るとかいった、何らかの望ましい配分について考える必要に迫られるのである。これが「効率的な資源配分」ということになる。

実は、ここまでの話は現行指導要領解説にも既に記述されていることである。

現行指導要領解説には「一般に、人間の欲求は多様で無限に近いものであるのに対し、財やサービスを生み出すための資源は有限であり、生み出される財やサービスもまた有限である。そこで、所得、時間、土地、情報などの限られた条件の下において、その価格を考慮しつつ選択を行うという経済活動がなされるのである。したがってここでは、市場経済において個人や企業は価格を考慮しつつ、何をどれだけ生産・消費するか選択すること、また、価格には、何をどれだけ生産・消費するかにかかわって、人的・物質的資源を効率よく配分する働きがあること」とある。

しかし、実際の公民的分野の授業の中では、もっぱら、需要と供給によって均衡価格と取引量が決まるというグラフの説明に時間が費やされていることが多く、効率的な資源配分について理解を深める授業実践が広がっていないことは問題であろう。今回、新学習指導要領に、既に文章としては記述されてい

た(教科書の本文でもふれられていた)にも関わらず、新たに「希少性」という概念が明示的に加えられたことは、市場経済の仕組みを教える上で重要なのは、需要と供給のグラフを覚えさせることではなく、希少性のあるものをどう効率的に配分するかという問題について考えさせることなのだというメッセージが示されているとも考えられる。需要と供給の話を理解することは大切ではあるが、効率的な配分の前提となる一場面に過ぎないのである。

②市場経済への誤解はどこからくるか

前項で述べたような効率的な配分をするためには2つの方法(制度)が考えられる。政府が個人々のニーズを把握し配分する「計画経済」と、個人々がニーズを表明し相互に交換を行う「市場経済」の方法である。日本を含む世界のほとんどの国が採用している市場経済による資源の配分とはどのようなものだろうか。

資源を配分するにあたって、その資源を「より必要としている」人の手に渡るようにしたほうが望ましい(無駄がない)と考えるなら、個人々がどれくらい欲しいかを意思表示して、それに基づいて配分すれば良いことになる。その際、共通の物差しとして機能するのが価格である。より欲しいと考えている人は高い価格を付けるだろう、価値を見いだせていない人は安い価格で手放すだろう、それを示す場が市場であり、価格を通じて意思表示をし合えば効率的な配分が行えるはずである。ここでは価格はその人の属性や身分、権力などからは独立しており、純粹に個人々人にとっての「欲しさ」を示していると考えられている。

このような仮説にもとづくなら、個人々が自然な欲望にもとづいて高い価格や安い価格を示しあい、交換しあうことが大切だということになる。

問題は、現実の社会が理想的なモデルとは大きく異なっていることである。先に述べたとおり、市場経済において価格がシグナルになり得るのは属性や身分、権力などから中立であると考えられているからであり、「欲しさ」だけを示している指標であると想定されているからである。権力者が有利な配分を受け取るのではなく、また特定の属性の人が不利な配分をされるのでもなく、価格のみによって必要とされているところが識別され資源が配分されることが意図されている、権力から自由になることこそを市場経済は意図しているのである。ただし、このように価格が「欲しさ」を示す共通の物差しであるためには、全ての人たちが同じ支払いの能力を持ち、「欲しさ」のみによって価格を設定できなければな

らない。ところが現実には、残念ながら支払い可能な価格には個人々人によって大きな格差があるし、しばしば権力と支払い能力とが繋がっている。これでは効率的な資源配分は行われず、権力や財力のあるところに「無駄に」資源が配分されることになってしまう。「市場では最も高い価格を『付けた』プレイヤーが商品を買うことができる。」ではなく、「市場では最も高い価格を『付けることのできる』プレイヤーが商品を買うことができる。」という誤った理解の背景には、このような理想的に語られるモデルとは乖離した現実があり、そのことから権力と価格を同一化して捉えてしまう錯覚が生まれているのである。

では、社会はこのような不完全な市場経済ではなく計画経済を選択すべきなのだろうか。計画経済では、政府が個人々のニーズを完全に把握できることが想定されているが、こちらも現実には非常に難しい。計画経済を試みた旧ソ連では、しばしば資源配分が非効率であったことが知られている。また、計画をする側とされる側に社会が二分されて特権階級化するなど多くの国で理想とはかけ離れた結果となったことから、現状では世界の国々のほとんどで市場経済が選択されるようになってきているのである。

結果として現在の世界では、市場経済を選択しつつ、市場が理想的なモデルに近い働きを行えるように政府が市場に介入することを求めるようになってきている。例えば独占禁止法の中の高価な景品の禁止などは代表的な事例であろう。政府に求められているのが、計画経済のように「市場の代わりをして計画に基づいた配分をする」ことではなく、妨げになっている問題を解決して「市場の機能を発揮させる」ことである事も重要である。

このように理想として教えられるモデルと現実が大きく乖離していることが、市場経済への誤った認識を育てている可能性が高いと考え、社会科の授業の中でも、現実の具体的な事例から市場経済を学ばせることを一気に目指すのではなく、モデルなどを用いて理想的な市場経済の姿をきちんと理解させた上で、具体的な事例を用いてモデルとの乖離について考えさせ、現実の問題や政府の働きについて理解させることが望ましいだろう。後段の教材としては、プロ野球選手のFA制度の事例は好適であると考え。

③「公正」としてのFA制度

ところで、プロ野球のFA制度を「効率と公正」の見方・考え方から捉えるとどうなるだろうか。

直感的に、FA制度によって選手が高い年俸の球団

に移動することは経済学的＝「効率」的であり、お金のないチームも良い選手を獲得できる方が「公正」である、と考える人もいるかもしれない。しかし冒頭で述べたとおりFA制度はチームの資金力がものを言う制度であり、必ずしも選手の能力を効率的に配分するとは言えない。これに対して例えばアメリカの大リーグで行われている完全ウェーバー制のドラフト（新人を獲得するドラフトでは成績が低かったチームに優先的に指名権が与えられる）はチーム間の資源配分を均衡化するより効率的（チーム力の均衡という点では公正でもある）な制度を目指しているといえるだろう。

ただし問題は、ここで配分されている「選手」は自由な意思を持った「人間」であるということである。それぞれにあこがれの球団があり、家族の生活との関わりから球団の地域を選んだり、どこでもいいから使ってくれるところを希望する等、願いを持っている。いわば「職業選択の自由」という「公正」の観点からも考える必要がある問題だということである。

ドラフト制（日本の制度の場合は効率的とはお世辞にも言い難いが）によって振り分けられた選手が一定の年数を経て自由に球団を選択できる、契約金はその際のマッチングのために登場する。FAで高額の提示を受けて希望する球団に移籍した丸選手は選択の自由を行使したわけである。

④「公正」というバイアス、「権力」と「価格」に関わる錯覚

私たちは自分なりの判断基準、これが正しいという信念を持って生活している。そのため直観的に自分が正しいと思ったことを「公正」にあてはめてしまうクセを持っている。市場経済をめぐる問題ではこのバイアスがしばしばいたずらをしてしまう。FA制度に対して、「大企業に有利な『効率』優先な制度であり不『公正』である」と考えてしまうのもその一例である。（前述の通り、実際の日本のFA制度は公正のための制度であり効率は犠牲にされている状況がある。）

コンサートのチケットがネットオークションで高値で取引されることが問題化したことがある。その際ある新聞記者が「本当に欲しい人が買えないのはおかしい」という記事を書いていた。確かに高いお金を「出すことが出来る」人の手に入るのは効率的とは言えない。しかし一方で気になるのは「本当に欲しい人」とはどうすれば明らかに出来るのかということである。記者に聞けば「こういう人がふさわしい」という答えが返ってくるかも知れない。しか

しそれは個人にとっての基準に過ぎない。そのような個人の感覚に力を与えることは、権力者の恣意的な選択と何ら変わらず、市場経済以前の権力や人脈がものを言う社会への後退を意味している。

社会には様々な、正していくべき不公正が存在しているが、その問題解決に取り組もうとした時に、市場経済のしくみを正しく理解せず、権力作用と市場経済を混同して理解していると、本来権力から中立的な配分をするための武器である経済理論を遠ざけてしまう。そして自分が納得しやすい個々人の恣意的な判断を「公正」としてしまうのであれば、それはむしろ権力に対して脆弱な社会になるであろう。個人の素朴な「公正」観、正義感に頼るのではなく、恣意性を廃した、権力に対して中立的な制度を構築することを目指すべきなのである。権力による恣意的な判断を廃することは、価格をシグナルとして用いることの持っている大切な機能のはずである。(実際に社会心理学の研究では、最後通告ゲームにおいて、市場化が進んだ社会の方がフェアな配分が提案され、伝統的社会で大きなばらつきがでることが報告されている。)
「モデルと現実の乖離」を学ばせることで、「権力」と「価格」は異なるものであることを理解をさせる必要があるだろう。

⑤授業の構成

以上のように考えると、「希少性」と市場経済のしくみを正しく理解させる授業は、次のような授業構成となる。

第1次：「理想的なモデルを理解させる」

○希少性の理解から効率的な資源配分の大切さに気づかせる。

○価格をシグナルとして資源配分を行う方法をとっていること、価格が権力から中立であることがその理由であることを理解させる。

教材：40個または20個のチョコレートの配分ゲーム

第2次：「モデルと現実の違い、必要な対応について理解させる」

○現実の社会では価格がしばしば権力から中立ではなく、財力によっても影響を受けるため、本来の効率的な配分ができなくなり何らかの介入が必要となることに気づかせる。

教材：プロスポーツでの資金力のある球団への選手の集中、機構（政府）の介入による効率性の確保。

【M選手の場合：高額な契約金（と本人の希望）により移籍：「FA移籍は市場経済の定めなのか？」】

【E選手の場合：移籍したが数年で控え選手となった：「選手の力は無駄なく生かされている（効率的）か？」】

【MLBの完全ウェーバー制：「市場が効率的に機能しないときはどう介入すべきか？」】

第3次：「効率と公正を適切に用いる必要性を理解させる」

○選手の球団所属は職業選択の自由とも関わる「公正」の問題であることを理解させ、私たちの公正の見方のぶれにも気づかせる。

教材：ドラフトで希望通りだった例と希望通りにならなかった例

【N選手の場合：ドラフトで希望通り地元球団に：「効率的な配分と職業選択の自由のどちらが大事？」】

【K選手の場合：周囲の説得で国内球団に：「効率的な配分と職業選択の自由のどちらが大事？」】

第4次：○「効率と公正」の見方・考え方をふまえて、より良い選手の配属方法を考えさせる。

教材：サッカーなど他の競技の事例

【FA制度の再検討、サッカーのレンタル移籍：「効率と公正を満たす制度を考えよう」】

4、学習指導案

- 目標
- ・「希少性」と「資源の効率的な配分」について理解させる。(知識・理解)
 - ・「価格」と「権力」の関係について、理想的なモデルと現実のそれぞれについて考察することが出来るようにさせる。(思考力・判断力・表現力)
 - ・社会の現実の問題について、経済の見方や「効率と公正」の見方を生かして解決方法を考えようとさせる。(学びに向かう力・人間性等)

学習指導過程

発問・教師の働きかけ	資料・教材	予想される反応・獲得させたい知識・留意点
<p>【第1次】</p> <p>○ここに40個の10円チョコがある。クラスで分けるとしたらどのように配分すべきだろう。</p> <p>○Aさんに、もし事情があっても3個食べなければいけないとしたら？</p> <p>○あきらめるのは誰がいいだろう。</p> <p>○もし、本当はそれほどチョコが欲しくない人が居たとしたら、どうだろう。チョコがなくて困っている人が居るのに、その人はもらったチョコを捨ててしまうかもしれない。</p> <p>○そもそも20個だったらどうだろうか。</p> <p>○どうやって配分すれば良いだろう。</p> <p>○普段はチョコが嫌いだけれどお腹が空いていることやその逆もある、先生は把握できるだろうか。</p> <p>○どうやって意思表示するのがよいか。</p> <p>○先ほどのAさんは高い価格を付ければ良いことになるが大丈夫だろうか。</p>	<p>チョコ40個</p> <p>チョコ20個</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1人1個ずつ ・ だれかがあきらめるべき ・ くじびき など <p>◇社会全体として無駄がある状態である事に気づかせる</p> <p>◇世の中のほとんどのものは「欲しい人が欲しいだけ手に入れたら足りなくなる」(=希少性) ことをおさえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 先生が事情を調べて配分する など <p>◇事情に合わせた配分(計画経済)が出来れば理想的だが、私たちのニーズは自分にしか分からないし変化するので現実には難しい。そこで個々人がどれ位欲しいか、いらぬかを意思表示し合う(市場経済)というアイデアがでてくる。</p> <p>◇誰もが程度共通した物差しに出来る「価格」を使うというアイデアに行き着く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お金がなくなりそう、それほど欲しくないお金持ちの手に渡るかもしれない <p>◇市場経済は「希少な資源を効率的に無駄なく配分できる可能性を持っているが、そのためには誰もが「欲しさ」だけで価格を決められなければならない」ことに気づかせる。</p>
<p>【第2次】</p> <p>○M選手が高額の契約金で移籍したことはどう評価すべきか。</p> <p>◇「FA移籍は市場経済の定めなのか？」</p> <p>○高額で選手を集めることは効率的か。</p> <p>○この選手を知っているか。</p> <p>◇「選手の力は無駄なく生かされている(効率的)か？」</p> <p>○価格で決めているのになぜ非効率になるのか。</p> <p>○効率的な選手の配分はどうすれば良いか。</p> <p>○アメリカではどうしているだろう、なぜこのような制度にしているのだろう。</p> <p>◇「市場が効率的に機能しないときはどう介入すべきか？」</p>	<p>M選手移籍のニュース記事</p> <p>E選手の記事</p> <p>完全ウェーバー制についての記事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市場経済だから仕方ない、不公正だ、希望だから仕方ない、など <p>◇日常語の意味では「お金のある球団にとって効率的」であるが、無駄がないか、という視点で考えるように指示することで、経済の考え方を活用させる。</p> <p>◇能力のある選手が集まりすぎて活躍できないとしたら無駄になっており球界全体のレベルを下けている=非効率であることに気づかせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「欲しさ」ではなく「払えるかどうか」で価格が決まっている <p>◇価格が持っている権力や財力の反映であれば効率的にはならないことをおさえる。</p> <p>◇本来の「価格」が権力から中立である事を期待されているのに現実にはしばしば重なってしまうことをおさえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 誰かが配分する、くじ引き など <p>◇くじはかえって偏る可能性があり、誰か一人が配分すれば権力が集中して弊害(恣意的な配分がされる、権力が暴走し始めるなど)が予想される。</p> <p>◇チームの力が均等になり、能力がある選手がちらばって活躍できる。機構がチームの希望を生かしつつ無駄がない配分になるような介入をしていること、社会では政府に同様の役割が期待されることをおさえる。</p>

<p>【第3次】</p> <p>○この選手を知っているか</p> <p>◇「効率的な配分と職業選択の自由のどちらが大事？」</p> <p>○選手の所属は効率だけで決めて良いか。</p> <p>○希望通りの球団に行けることが「公正」か。</p>	<p>N選手, K選手の入団時の記事</p>	<p>◇希望通りの球団に指名されて喜ぶ選手がいる一方で希望が絶たれた選手もいたことをおさえる。</p> <p>◇職業選択の自由という「公正」の問題でもある。</p> <p>・本人の希望は大切だ, 家族のことを思うのは自然, 高い年俵を求めることも正当な権利だ など</p> <p>◇個人の人生に関わる部分もあり, 外部から効率性を押しつけるべきではないという面がある問題である。一方で, 結果として資金のある球団に選手の集中などが起こる可能性もある。これは効率的では無いだけでなく, 現実の社会では「力を持っている球団が『価格を通じて』権力を行使しており不公正とも言える。そういう現象起きにくい制度を設計することが大事であることをおさえる。</p>
<p>【第4次】</p> <p>○F A制度以外に方法はないのか？</p> <p>◇「効率と公正を満たす制度を考えよう。」</p>	<p>サッカーの制度の資料 C選手の移籍の記事</p>	<p>・サッカーではレンタル移籍などの制度で選手が活躍しやすいような工夫がされている。野球でも人的補償などが試みられている。</p> <p>◇サッカーにおいても高額な契約金が問題となっていること, 「ボスマン判決」の関わりにふれる。</p> <p>◇様々な仕組みのねらいを考えさせるとともに, その制度での価格の役割について考えさせる。</p> <p>◇完全な制度はないことをふまえつつ, 学習したことを生かしてより良い制度について構想させる。</p>

7. 成果と課題

本研究の成果は, 市場経済に対する誤解が生じる理由について考察し, 仮説に基づいてそのような誤りに陥らないような理解をさせる授業の在り方を提案し, これに沿った授業指導案を開発したことである。

課題は, 年間カリキュラムの関係から授業が未実施であり評価を行うことが出来ていないことである。今後は実践や評価を行って効果を検証し, より良い授業モデルを開発していきたい。

参考・引用文献

文部科学省, 「中学校学習指導要領解説 社会編」, 2017

文部科学省, 「中学校学習指導要領解説 社会編」, 2008

ジャン・ティロール, 『良き社会のための経済学』, 日本経済新聞出版社, 2018

ヨラム・バウマン, グレディ・クライン『この世で一番おもしろいミクロ経済学』, ダイヤモンド社, 2011

亀田達也, 『モラルの起源』, 岩波新書, 2017